

加工・業務用需要に対応する冬穫りレタスの大玉生産技術

【背景・目的・成果】

淡路地域では、これまで秋～冬～翌春まで主に生食用レタスの市場出荷がなされています。一方、近年、食の多様化から、加工・業務用需要が増大し、その対応が求められています。しかし、冬期の栽培では、低温のため小玉化し品薄状態となり、供給不足が問題となっています。

そこで、加工・業務用需要に対応するため、冬期でも大玉が生産可能な栽培様式と品種の検討を行いました。畝幅150cmの中型トンネルを使用し、3条植え、株間30cmの栽培様式で、作型ごとに球重が600～700gの大玉品種を選定することで、4t/10aの収量が得られます。

作型	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	品種名 ^z (種苗会社)	2016年度の結果 ^y		
									球重 (g)	L以上 球率(%)	収量 (t/10a)
年末～ 1月穫り	播種 ○	定植 ▲						ビブレ (フジシート)	724	100	4.7
2月穫り		○	▲					LE333 (フジシート) SYL-510 (シンジエンタ)	618 (LE333)	77 (LE333)	4.1 (LE333)
3月穫り			○	▲				LE333 (フジシート)	616	88	4.1

^z品種はすべてレタスピッグベイン病耐病性品種

^y畝幅: 150cm、株間30cm、3条マルチトンネル栽培、施肥量: 年末～1月: N25kg/10a、2月: N32kg/10a、3月: N28kg/10a

図1 加工・業務用需要に対応する冬穫りレタスの作型と品種

加工・業務用の中型トンネル3条栽培

生食用の小型トンネル2条栽培

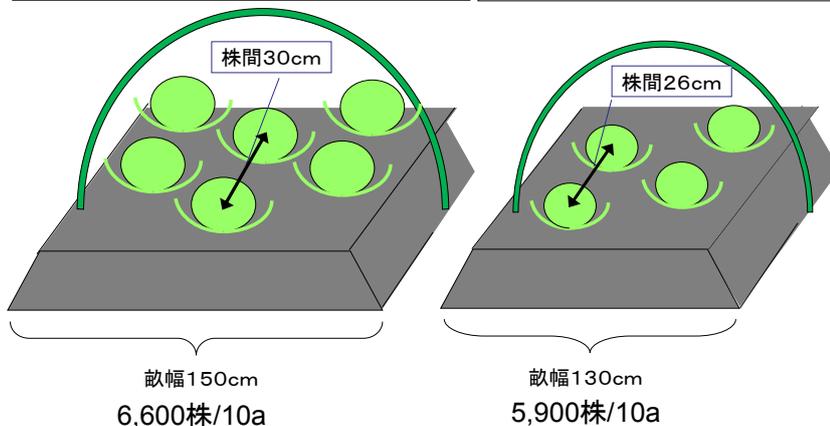


図2 加工・業務用レタスと生食用レタスの栽培様式の違い



写真 栽培様式の違いと球の大きさ
(品種:「SYL-510」)

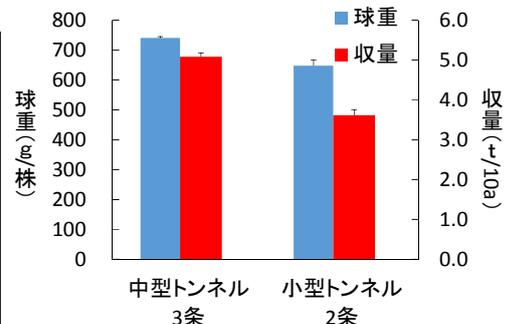


図3 栽培様式の違いがレタスの球重、収量に及ぼす影響(2015年、品種:「SYL-510」)

【技術の活用】

- 加工・業務用レタスは、収穫適期を逃すと加工歩留りが下がるので、適期収穫を厳守する必要があります。フィルム包装は不要で、外葉を2～3枚残し、コンテナに12～16玉入れ出荷します。
- 中型トンネル3条植えの栽培様式を導入するため、資材コストは生食用栽培に比べ、10a当たり3千円(育苗、マルチ、トンネル支柱(5年)、ビニール(3年))増加しますが、出荷調整作業が短縮されるので、総作業時間は10a当たり25時間短くなります。